初恋？

Cid

初恋？

その日もいつもとは変わらない通学路だった。
そらに輝く太陽は春の穏やかの陽気を作り出して居た。
相変わらずこの季節は憂鬱で新しいクラスに慣れる為とか絵にかいたような友達を作る為に僕自身で僕自身を作らないといけないからだ。
そう一人ぼっちを避けるために。

「これから先もずっと同じような事を繰り返すのかな？」
呟いてみても其れを答えるのはやっぱり僕自身で、
僕はその独り言の答えを飲み込んだ。
こんな事を考えて居たら、気分は落ちるだけで学校に向かう足はだんだん学校から離れていく。
「サボるか」頭の隅の言葉は既に学校とは離れた全然違う方向に向かいって居る時に囁いたのであった。

学校に行かずにそのまま帰る事も許されない。
横を見るとブランコの置いてあるだけの公園を見つけた。
公園に入り空を見上げた。

サボるのは初めてでは無かった。
今日こそは理由があるけど、いつもは理由なくサボってみる。
いくつも正当な言い訳を考えたら、幾らでも出てくるし、大人は僕に興味有り気に聞いてみても、それは外面の話だと何となく解るから、その手の理由が良く似合って居ると勝手に思って見る。
それってただ単純に今日が面倒くさくなってサボった僕に似ているようにも感じた。

ブランコに腰かけて、
また空を見上げた。空はどこまでも青くどこまでも広がって居た。
雲がまた違う雲と競争して居るようで僕はふと自分に重ねてみたりする。
「ずっとこのままなのかな？」
また勝手に言葉が零れた。

「サボりはいけないんだぞ！」
楽しそうな言葉が聞こえた。それが僕に向けられた言葉だとすぐにわかった。
前を見ると女の子が立って居た。
見た事の無い子だったが制服は僕の通う学校の制服だった。

「君は？」
純粋に思った事聞いてしまった。
「あたしは今日、あそこの学校に転校してきたんだ。」
と言い僕の通う学校がある方向を指さした。
「道理で見た事無いわけだね」
地面に話しかけ見た。
「ねぇ何でここに居るの？やっぱりサボって居るの」
やはり楽しそうに聞いてきた。
「そうだよ。君は？遅刻だよ。」
僕はポケットから携帯電話を取り出して時間を確認した。
「あたしもサボってるの。今日は転校一日目なんだけど何だか面倒くさくなちゃったから。」
と云いながら僕の隣のブランコに腰かけた。
「サボりはいけないんだ。」
彼女に云われた言葉を返した上げた。
「知ってる知ってる。
ねぇ何でサボってるの？」
楽しそうに聞いてきた。
「解らないけど、面倒くさくなったからかな？理由は君と変わらないよ。」

楽しそうだった彼女は突然声を荒げた。
「3回目！君って云うのやめてくれなかな？」
「ごめん」
僕はすぐに言葉が出て居た。
「名前なんていうの？」

「内緒」と一言だけ柔らかな日に包まれた彼女はとても可愛いらしい顔をして居る事に初めて気がついたのだ。

Fin